

第15回 大学とは何か？（2月21日金曜日）

こんにちは。

長崎大学人、河野茂です。

今回のメール発信は、これで最後です。

前回は、学問とは何か？ 大学で学生に何を教えるべきか？

など抽象的な問いを皆さんに投げかけました。

最後の問いは、＜大学とは何か？＞です。

私は、長崎大学を卒業後、一時は外の病院で働きましたが、その後の大半の人生を
本学で過ごしてきました。苦しかった時期、楽しかった時期、いろいろありました。もち
ろん、今も、現在進行形で、皆さんの力を頼りに日々悪戦苦闘しながら進んでいます。

では、そもそも大学とは何なのでしょう？

いくつかの本を読むと、Universityの語源はラテン語の「Universitas」で

自治的な学生ギルド（≡組合）という意味だそうです。

世界最古のひとつと言われている中世のボローニャ大学では、

学びたい学生が集まり教授の人選を学生が行い、授業内容も学生が決める。

人気のない教授を学生が解雇し、学長も学生が選ぶ…と、書かれています。

完全な自治区のようでした。

今の大学とはまったく異なります。

<大学の自治>という言葉は、私が入学した学生運動が盛んだった1970年代には、

当たり前のことでした。

教職員と学生が対立し様々な議論はありましたが、大学の自治を維持するという点では、

共通認識を持っていたように思います。

私も、比較的自由的な雰囲気の中で、自由に研究させてもらったと思います。

振り返ると、古き良き時代でした。

今、大学の中で「自治」という言葉は、ほとんど死語になりつつあります。

吉見俊哉著「大学とは何か」によると、転機は2001年小泉政権が打ち出した新自由主義

により文科省が打ち出した、国立大学への方針によるとあります。

再編統合、民間的経営、第三者評価による競争原理導入、いわゆる当時の

遠山敦子文部科学大臣の名前を取って「遠山プラン」と呼ばれています。

2004年には文科省の下部組織だった国立大学が、独立した法人格を持ち

自主的・自律的な運営を迫られ、運営交付金も毎年1%減額が課せられました。

毎年1%というのは、極めて大きな数字であり、本学の財政も大変厳しい状況です。

簡単に言えば、大学改革の流れは、

「生き残るために自由にやっていいけど、お金はださないよ」

というスタンスなのですが、これが思った以上に自由ではないというのが、

全国の大学人の感じるところでしょう。

私も、みなさんと同様に、国に対して、言いたいことは沢山あります。

どこの学長も同じでしょう。

大学とは何か？ という問いに戻りますが、今「大学」の定義そのものが、

激しい現代社会の流れの中で、変化しており、極めて答えにくい問いです。

今回の入試改革の騒動も、大学に求められている姿のブレから生じたものかもしれません。

答えにくい問いですが、ミッションの再定義、評価機構による評価、文科省との徹底対話…、

次々と出る「長崎大学とは、何ですか？」という問いに、毎年のように

答え続けなければなりません。

その問いの答えのひとつが、

「プラネタリーヘルスに貢献する長崎大学」

だと思えます。

長崎大学丸の乗組員は、「長崎大学とは何か？」という受験生からの、保護者からの、

県民からの、文科省からの、国民からの問いに答えなければなりません。

卒業生が旅立ち、また新しい学生がやってくる季節がもうすぐやってきます。

ここで、

「学問とは何か？」「学生に何を教えるべきなのか？」「そもそも、長崎大学とは何なのか？」

を、問い直すことが案外大事なこともかもしれません。

是非、あなたのご意見をお聞かせください。

メールを待っています。

2月も、読んでくれて、ありがとう。

今回も多様な意見を頂きました。

重ね重ね、感謝します。